

この『ピランデッロ戯曲集Ⅱ』に収められた『エンリーコ四世』と『裸体に衣服を』は、前年の『作者を探す六人の登場人物』と同様に、彼の創造力のボルテージが異常に高かった一九二二年の作品です。

『エンリーコ四世』は、ピランデッロの力がみなぎった偉大な作品で、おそらくは二十世紀演劇の中で最も優れた悲劇の一つと言えるでしょう。現代にありながら神聖ローマ皇帝と化した主人公が、狂気をバネに過去と現在——十一世紀の《カノッサの屈辱》と、二十世紀の青春を奪われた人間の屈辱——の間を行き来しながら、彼の訪問者たちを強引に自分の狂気の演技に付き合わせて手玉に取る。その嘲弄の凄まじさは、『明晰な錯乱』の牢獄に閉じ込められた主人公の悔恨と絶望の凄まじさの裏返しです。現代においてこのように本格的な悲劇作品が生まれたことは、訳者にはまさに奇蹟的な出来事のように思われてなりません。

『裸体に衣装を』は本邦初訳の作品で、きわめて現代的なテーマである人間のイジメの衝動（＝動物的な嗜虐本能）を扱っています。それは若くて心優しい女性が、彼女を取り囲む男たちの心に動物的な攻撃本能を誘発して、人生の終わりに纏おうと思つた美しい嘘の衣装までも次々と食いちぎられて、裸のまま死んで行くという悲痛なドラマです。

この作品はミステリー仕立てで、登場人物たちの対話の端々から、次第に少しずつ事件の真相が明らかになって行きます。ですから、少し注意して読んでいただければ、読者の予想を裏切る展開が続いた末に、最終場では、人類の嗜虐本能を不可避の本性として、自分を死に追い込んだ人々の罪を赦して死ぬヒロインの、清らかな女神のような慈悲心に、人は心を動かされるでしょう。

二〇二二年九月一日

訳者 斎藤泰弘